慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アメリカ時代に於けるリストの経済思想
Sub Title	
Author	山田, 正夫
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1927
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.21, No.4 (1927. 4) ,p.549(105)- 581(137)
JaLC DOI	10.14991/001.19270401-0105
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19270401-0105

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

and did harm so long as their reins were slackened.

吾人は不滿多き英國農民生活の一端を窺ふた。戰爭に由る課稅徵金の增加並に壓制は農民の生活を悲慘のものとした。然し Poitiers の戰爭（一三五六）の直後佛蘭西の「野獸の如き生活」をして居た農民に由つ起された Jacquerie の亂に比すれば英國の農民反亂は遙かに狂暴の程度に於て輕かつた。之はやがて英國農民の佛蘭西農民に比すれば優れたる生活をして居たと云ふ事にもなる　次に Froissart の Jacquerie に關する觀察を引用して此間の消息の參考として本稿を終る。

"Wherever they went,.....all of their rank of life followed them, whilst every one else fled, carrying off with them their ladies, damsels and children ten or twenty leagues distant, where they thought they could place them in security.... These wicked people, without leader and without arms, plundered and burnt all the houses they came to, murdered every gentleman, and violated every lady and damsel they could find. He who committed the most atrocious actions, and such as no human creature would have imagined, was the most applauded....I dare not write the horrible and inconceivable atrocities they did." (iv. ch. 26)

（一九二七、三、一七）

アメリカ時代に於けるリストの經濟思想

山田正夫

Friedrich List が米國滯在中に執筆した論文は、Der Adler 紙の社說として掲載したものを始め、Pennsylvania Society の委囑を受けて公刊した諸種の小冊子、乃至は故國の知友に寄せた諸般の論策等に至るまで、その悉くを算へ上げれば夥しい數に達するが、當時彼の懷いて居つた經濟學說の根據が奈邊に在つたかを窺はうとするには、必しも是等の總てを知る必要はない。私はその內の唯一篇を以て能く此の目的を達することが出來ると考へるのであるが、その一篇とは始め Philadelphia National Journal 紙に連載せられた The American System と題する十二通の公開狀であつて、後に最後の一通を除いて Outlines of American Political Economy なる書名を附し正續二冊の冊子として頒布せられたもの之である。

List の主著 Das nationale System der Politischen Oekonomie は、彼自らその序文に於いて述べて居るように、色々な機會に發表した各種の論策を綜合したものであるが、今その主要なる論據を取つてかの公開狀と對照して見ると、比較的簡單ではあるが殆どその總ては既に早く此の中に陳べられて居ることを發見するのである。のみならず或る學者の主張に從へば、List は米國に渡るまで

は正統派經濟學の論旨を信奉して居つたのであつて、此の公開狀に披瀝した所論こそ正に正統學派に對して反旗を揭げた彼の學說の變遷上に於ける劃期的のものであると言はれて居るし、よし又他の學者が論證したように彼の正統學派反對の態度が渡米以前に既に確立して居つたものにもせよ、その見解を組織的に論述したものは、矢張り此の公開狀を除いては、それより以前に見ることが出來ないのであるから、何れにしても此の公開狀は List を研究する上に觀過する能はざる重要なる地位を占めて居ることは疑を存せぬであらう。

此の公開狀の外に、その內容から見て Das nationale System と密接な關係を有するものとして未完の稿本 The American Economist の第一章が在るが、之は英國の經濟史を述べたもので List の歷史的見解を知る上には勿論一瞥を缺くことの出來ぬものではあるが、彼の理論的根據を衝かんとするにはさして重視するにも及ばないと思はれるから、その研究はしばらく他の機會を待つことにする。その他の諸論策に至つては何れも時事問題に對する實際政策に專らなるものであるから、敢て深く顧るまでもあるまい。

斯くの如き次第であるから私が本稿に於いて亞米利加時代に於ける List の經濟思想として記さうとするのは、悉く此の十二通の公開狀の紹介に終始する。之が如何なる事情の下に執筆せられたものであるかといふことは、嚮に發表した拙稿に些か詳かに記して置いたから茲にはすべて省略する。又之が學史上如何なる意義を有するかといふ問題は、此の小論文に盡すことは倒底不可能であるから、これ亦此處には割愛して他日に稿を新にしようと思ふ。

以下各書翰の最初に記す日附は、List がその書狀を執筆した日であつて新聞紙上に發表した日を示すものではない。

第一信　一八二七年七月十日。

Pennsylvania Society の副會長 C. J. Ingersoll に宛てた List の十二通の公開狀は先づ次の樣な言葉を以て始まる。『貴下の要求に接して余は甚だ光榮に感じた。從つて只、一時病魔の爲に阻げられることさへなかつたならば、余は決して貴意に應ずるに一刻だも躊躇するものではなかつたのである。今漸く全快するに至つたから、余はこれから、嘗に數ヶ年の研究に依るのみならず、また余が獨逸國民經濟組織を確立せんとの目的を以て獨逸工業協會顧問の地位に在りし間の久しきに亙る實際上の努力に依つて得た政治經濟に對する考察の結果を、速かに貴下にお傳へしようと思ふ。』List は此の公開狀に於いて、當時輿論の中心となつて居た米國關稅問題に關する實際上の材料を蒐集して來て、自ら論爭の渦中に投せんとしたのではない。斯くの如きは既に米國政論家の慧眼よく之を觀破し盡して餘す所のないまでに至つて居るから、『余は余の努力を專ら、未だ根本的誤謬の正しく了解せられて居ない Adam Smith 社中の學說の論難攻擊に注がうとするのである。』と彼は斷つて居る。曰く、『American System の反對論者に對して、學問上の理由を提供するものは此の學說に外ならない。反對黨が表面上極めて有力に思はれるのは、かの自稱理論家と、所謂自由貿易を有利であると信奉して居る輩とが結束して居るからである。之等の Smith と Say との徒弟等は勝手に自分等は學識と智能とが優れてゐるものであると獨り定めをしてそれを鼻に掛け、常識を護つて居

る樣な者は皆、自分等が指導者と仰ぐ大家の高遠なる學理を十分咀嚼するだけの頭腦の力もなければ學問上の素養もない一箇の經驗論者に過ぎないと考へてゐる。その上不幸にも、此の危險なる學理の創說者等は非常に偉い智力を備へて居た人達であつたから、謂はゞ空中の樓閣にも等しい持論を、甚だ强固な、堅實な土臺の上に立つてゐる樣に思はせる位のことは、彼等の伎倆を以てすれば實に易々たることであつたのである。』斯くの如き次第でこの學說は、旣に永い間政治經濟の興味を有する人々の殆と悉くに依つて信じられて來て居るのであるから、唯々羊毛工業者の利益ばかりを見て保護貿易を高唱するだけに止まらず、先づ事の本源に溯つて反對論の根底を覆し、American System の眞義を普及せしむることを以て、須らく刻下の急務としなければならぬのである。況んや事實は之に反して、近頃 Cooper 博士が Elements of Political Economy を著し、此の愚論を粉飾して世人を惑はし、靑少年の指南車として學校に於てまで採用せらるゝが如きに於てをや。

以上の如き前提の下に List は本論に入り、先づ凡そ一口に政治經濟と稱して居るものに三箇の分野の在ることを明にして、自己の立場を示して居る。則ち彼が政治經濟を構成する三部門といふのは、(一)個人經濟。(二)國民經濟、及び(三)人類の經濟が之である。曰く『Adam Smith は個人經濟と人類經濟とを論じてゐるだけである。彼は一個人が社會の內に於いて他の多數の個人と共にどういふ風に富を創造し、之を增殖し、若くは之を消費するか、又人類全體の產業と富とは、個人の產業と富とに對して如何なる影響を及ぼすか、といふことを敎へて居る。彼は著書の表題として選んだ Wealth of Nations といふ辭句に依つて論じようと約束したことを全然忘れてしまつたのである。樣々の國民の勢力、構造、欲望、文化が皆悉くその狀態を異にして居ることに考慮を拂はず、只若しも人類が幾多の國民に分れずに普遍的な法律と、平等な精神上の敎養とに依つて結合せられてゐる場合には、個人の經濟と人類の經濟との間には如何なる關係が存するであらうかといふ問題を論述したに過ぎない。此の問題を彼は極めて論理的に論證してゐるのであつて、從つて斯くの如き假定の上に於ては、彼の著書は實に大なる眞理を含んでゐるのである。全世界が若し恰かも北亞米利加の二十四州の如くに結合されて一の聯盟を形成して居るものとすれば、自由貿易は現に合衆國內に行はれつゝあると同樣に、全く自然に且つ有利に行はれるであらう。さすれば地球上の或る地域を特に區分したり、全人類の內から特に或る數の人間を分離したりして、世界全體と利害を異にせしむべき理由は何處にも存せぬのである。人類全體の自由と相容れない樣な國民的利害も無ければ、國民的法律も無く、將亦何等の拘束、何等の戰爭の在るべき筈はない。總ては自然の潮流に從つて流れて行くであらう。』と。

斯くの如き狀態は非常に望ましいものであつて、遠き未來に於いて人類はやがてこうした世界を實現するに至るのであらうが、之を以て直ちに現實世界の狀態であるとは考へられない。『戰爭は國民同士の果合である。自由貿易に對する制限は諸國民の產業の力の間に行はれる戰爭に外ならない。』それだからと言つて如何に熱烈に平和の標語を口にし、四海同胞の理想に渴仰しつつある軍務大臣と雖も、現在自國の軍備が全然賴むに足らないにも係らず之に安んじて、遠大なる理想のために城塞船艦の築造を拒み軍人の訓練を廢してしまはうとする樣な者は一人としてないと同じ道理

で、Adam Smith の學說體系が示してゐる理想の爲に惑はされて之を現實の世界と混同し、自國の貧弱な產業狀態も顧ずに無暗に自由主義を實現しようとあせるが如きは、誠に憫笑に堪えざる所である。

茲に注目すべきことは List は決して自由主義の學說を徹頭徹尾信ずるに足らない謬論であるとして排斥してしまつた譯ではなくて、Smith の學說が科學上有益なる貢獻をなしたことを承認して居る點である。『余は學問上の根本的原理なるものは、只 Smith が行つた樣に個人の經濟と人類の經濟とに對する研究に依つてのみ發見することが出來るものであると信じてゐる。彼の誤謬は此等の一般的原理に加ふるに人類が幾多の國民的團體に分れて居るために起つて來る變化を以てせず、定則に對する例外、兩極端に介在する中間要素を度外視したことに在るのである。』そして此の中間要素として Smith の所論の缺けたるを補ふものこそ國民經濟の研究なのである。

『國民經濟學は、特殊の狀態の下に在る或る一個の國民が、或は外國の拘束と勢力とを阻止し、或は國內の生產力を增進せんが爲には、如何なる手段方法を講じて個人の經濟を指導制御し、人類の經濟を統制すべきであるかを敎へるものである。』

第二信　七月十二日。

既に述べた樣に正統學派及びその徒弟の一人なる Cooper 博士等の所論は只個人の經濟と人類の經濟とばかりを見るに止まり、『平和若くは戰爭に對しても、特殊の國家若くは特殊の國民に對しても、少しも考察を廻らしてゐないのである。彼等は人類が多くの國民に分立してゐる事實を些も認めて居ないのである。斯くの如き見地から Say 氏は佛蘭西に於いて露西亞から軍需品を輸送して來るのに、和蘭人に請負はす方が一噸當り十五フランも安くあがるにも係らず、佛國政府が態々自國の船舶を使つてゐるのを非難して居る。』而も此の場合 Say は經濟上の考察と政治上の考察とは自ら異るものであると附言してゐるのである。所が往々にして出藍の譽といふことがある通り、米國の一國會議員は此の論理を推し進めて至極眞面目に、若し火藥が英國に於て米國よりも安く製造されるならば、英國から輸入したらいゝではないかと主張した『果して然らば米國は戰時軍艦と水兵を英國から傭つて來る方が經濟上甚だ有利であるから、軍艦を皆燒いてしまつた方がよからう、とは何故主張しないのであらう。』之と同じ意見を懷いて Cooper がその著の中に『政治は本來政治經濟學の一部ではないことを記憶せねばならぬ』。と言つて居るが、List は之に酬ゆるに『化學は本來化學工藝學の一部ではないことを記憶せねばならぬ』。といふ對句を揭げて、化學者 Cooper 博士が果して之を承認するや否やを詰問してゐるのである。

則ち List に從へば、政治經濟學は既にその名稱の內に政治の含まれて居ることを示して居るのであつて、若しこの二者を別々のものにしようと言ふのなら、只經濟學といふ名稱だけでいゝのである。正統學派の取り扱はうとしてゐるのは政治經濟學の名に相當するものゝ如くに思はれるが、その實彼等の論じてゐる所を見ると、その名稱とは全く異つた世界經濟を對象として居ることを發見するのである。

それでは List が補はうとする國民經濟とは如何なるものであるか。『抑〻國民經濟なる概念は國

民といふ概念に伴つて生じて來るものである。一國民は多數の個人と人類との間に存する媒介者である、多數の個人より成る別個の社會である。之等の多數の個人は、共同の政府、法律、權利、制度。利害、共同の歴史と榮譽、權利、富並びに生活に對する共同の防衛と保安を有して自由獨立の一團體を形成して居るのであつて、此の團體はその利害の命ずる所に從つて動き、內には最大の共同福利を增進し、外には最大の安全を樹立するが爲には、之を形成する各個人の利害を拘束すべき權力を具へてゐる。此の團體の經濟の目的は、啻に富と個人と世界經濟とばかりではなくして、力と富とである。何となれば、國民の富は國民の力に依つて增進せられ、國民の力はまた國民の富に依つて增進せらるゝが故である。從つてその指導原理となるものは啻に經濟的なるのみに止まらずまた政治的のものである。』

一國の力と富とは共に國內に於ける農業、商業及び工業の調和に依つて完全な增進を期待せられるのであつて、『此の調和の存せざる所に國民の有力にして富裕なるを見ることは出來ない。單なる農業國は、市場も貨物の供給も皆外國の法律若くは外國の好意惡意に依つて左右せられてゐる。更に工業は學藝技術を養成して力と富との源となる。Say 自身も認めてゐるように、單なる農業國は常に貧困である。貧困な國は賣るものも澤山なければ買ひ入れるものも甚だ少いから、決して商業が繁盛する筈はない。何となれば商業は賣買に依つて行はれるからである。』

それでは政府はこの調和を計るためには、個人の產業を拘束すべき權利を有するものであるか、將また法律と制限とを行使してよく、此の調和を招くの能力を有するものであらうか。List は言ふ、『政府は苟くも國民の富と力とを增進するものであつて、個人に依つてはこの目的が達せられない樣なものである以上は、啻に之を促進すべき權利を有するに止まらず、また之を行ふをその義務とするのである。』と。故に商人だけでは貿易が安全に遂行せられ相もない場合に、或は海軍力を動かし、或は航海法を定めて之を掩護するのは政府の義務に屬することであつて、貿易も亦一面海軍力を維持し國家の力を擁護するものに外ならない。故に若し又一國の製造工業が外國の資本と技術との壓迫を蒙つて立ち行かないようなことがあれば、保護關稅を施してその隆盛を劃策することも亦當然のことである。

『保護政策の便宜に關しては、余はこれは全く一國民の能力の如何に依存するものであると考へる。』凡そ人に老幼强弱の別を見るが如く幾多の國民は皆悉くその事情を異にしてゐるのであるから小兒と巨人と、幼年と老年との差別なく常に同一の處方を以て藥を盛ることが出來ないのと同じくあらゆる國民を一樣に自由放任の主義を以て律せんとすることは不可能である。故に『優秀』なる國民經濟を擁して繁榮を極めつゝある英吉利と、纔かに『獨立』の域に達せんがために呻ぎつゝある合衆國とに、何等の類似の存せざるは愚か、その間の逕庭たる天地霄壤にも比ぶべきものあるに係はず、彼比相携へて同じ道程の上に步みを共にせんとするが如きは、無謀も甚しいものと言はねばならない。

第三信　七月十五日。

Adam Smith の學說は今や廣く世界に傳播するに至つて、誰しも之を絕對的眞理の如くに考へて

ゐるから、些かたりともその所論に疑を挾みでもする者があれば、恰も痴呆愚昧の樣に罵詈を浴せ掛けられるが、よく考へて見ると豈に計らんやあらゆる時代の先覺者は、その論法に從へば皆之れ所謂政治經濟學の眞理を解せざりし無智無能の痴漢であつたといふことになる。『Edward 三世然り、Elizabeth 然り、Colbert 然り、Turgot 然り、Frederick 二世然り、Joseph 二世然り、Pitt 然り、Fox 然り、Napoleon Bonapart 然り、Washington, Jefferson, Hamilton 皆悉く然り。』即ち正統學派に反對する者は、之等の大人物と列を共にするの甚だ光榮なるに滿足すべきであらう。然らば List が正統學派に對して抗爭する所以は、自ら愚人の嘲りに甘んじて之等の大人物と列を伍せんと欲するが故であらうか。

List は一身の過去を顧て云ふ、『永年の間余は啻に忠實なる Smith 並に Say の學徒であつたばかりでなく、此の强固な學說の極めて熱心な敎師であつたのである。啻に之等巨匠の大著を研究したるに止まらず、英獨佛に於ける彼等の高弟達の著述までも精勵不撓して攻究したのであつて、壯年の頃に至るまで遂に余は此の敎義を改宗するに至らなかつた。』然るに當時の實際狀態はどうであつたかと言ふに、恰かも大陸封鎖令が徹廢せられた直後であつて、歐洲大陸にはそのために低廉なる英國貨物が流入して來て一時は非常に有利な樣であつたが、此の競爭者の出現に依つて嘗て漸く繁榮に赴きつゝあつた農工業は幾もなく存在の地位を脅やかされる樣な有樣に陷つたのである。眼前にこの事實を眺めながら如何にして自由競爭の學說に疑無きを得るであらう。『余は私かに信じた、例へば藥學上の理論がよしんば如何程美事に創說せられ、如何程立派な眞理に依つて證明されてゐようが、もし此の藥を服用する者の生命を害する樣なことがあれば、その理論は必ず根本から間違つたものであると稱して憚かる所のないと同じ理由で、政治經濟の學理とても常識を有する一般の人士から見て、必ずこういふ樣な結果が生じて來るであらうと期待してゐる所と全く相反するやうなことがあれば、必ずそれは誤つてゐるに相違ない、と。斯くの如き確信に基いて余は公々然と此の派の學說に反對の態度を示したのであるが、かゝる反對意見は當時非常に廣く懷かれて居つたので、僅か二三週足らずの內に舊獨逸帝國の全體に散在してゐた一流の製造業者及び商人を網羅せる一協會が、獨逸國民經濟組織を建設しようといふ目的の爲に創立せらるゝに至つたのである。』語を次いで List は更に彼が此の協會の顧問として百方奔走し、諸邦政府乃至は各團體等の讚助を得るの容易なりし事情を陳べてゐるのである。而も玆に見逃すことの出來ないのは、Say 自身が旣に同國人の爲に駁論を浴せ掛けられてゐることであつて、化學者としても政治經濟學者としても名を知られてゐる Chaptal 伯爵は、化學上の研究に於ても又政治上の努力に於いても甚だ熱心に佛蘭西工業の促進の爲めに盡瘁した人であつたが、その著書 de l' Industrie Française. 1819. の第一卷第十五章には、直接に Say に對する鋭鋒こそ向けてゐないが、最も實際的な、最も堅實なる反對論を披瀝してゐるのである。

今や英國は自ら起つて正統學派の所論を實現して範を世界に示し、Canning 氏及び Huskison 氏は口に世界主義の主張を高唱して列國を遊說せんとしつゝあるが、その內面には實は驚くべき巧妙なる政治的策略が廻らされてゐるのであつて、之に依つて英國はその生產力と政治的權力とを縱

に擴張して威を世界に振はんと欲してゐるのである。かの Eden 條約も Mathuen も皆悉く此の目的の爲に結ばれたものに外ならない。いかで彼等の主張に不和雷同し、彼等の行爲に渦仰盲從して、國家百年の計を誤ることが出來ようか。

夫にも關らず世の識者の殆ど總てが此の學說を無條件に承け容れてゐるのは、前にも述べた樣に Adam Smith の學識と才能とがよく前人未踏の貴重なる眞理を數多發見し、渾然たる一大體系を樹立するに至つたからで、世人は忽ちの中にかの『經濟學者』の說を棄てゝ此處に集まつて來たのであつた。世界は斯る著述を希望してゐて居たのである。『世界主義の精神に導かれたる此の書籍が現れた當時は、未だ世界主義が廣く行はれてゐた時分であつたから、世人は喜んで之を迎へたのである。』更に之は、銃鎗に訴へては到底獨立する望のない弱小國民に對して、自由貿易の力に賴ればその地位を全うすることが出來るといふ美はしい慰藉を與へたのであつた。そして第三に此の學理の眞隨を究めることが甚だ容易であつたといふ事實もまたその普及を援けた一つの理由として見逃すことは出來ない。即ち此の學理は、『產業の拘束を徹廢せよ、之を自由ならしめよ、之を放任せよ。』といふ甚だ簡單な文句に約めることが出來るのであつて、此の標語さへ記憶してしまへば、賢明なる施政者とならんとするには何等の才能も何等の努力をも必要とはしないのである。

『然しながら世界は實際上にも知識上にも Adam Smith の時代このかた驚くべき進步を閱した。……新らしい型式の政府を戴き、一般の幸福と自由といふ新しい思想を擁する國民は興起した。この國民はあらゆる政治問題を廣く且つ自由に討究して、眞と僞、幻想的體系と明瞭なる知覺、世界的原理と政治的原理、古語と實際、等を悉く峻別すべきことを學んだ。……Napoleon は全世界を統一して、人類をして一般的に且つ自由に好を通ずることの出來る樣な惠福に浴せしめんが爲に、大なる煩勞をも厭はず自ら進んでその局に當らうと欲したのであつた。併しながら英國人はこの樣な一般的幸福といふものを希はなかつた樣に思はれる。之と同じく米國人とても、自國の國民的獨立と勢力とを、英國の權勢の上に築かれた普遍的な萬國法と交換することなどは決して好まないであらう。——彼等はかくの如き前途の見込みを快しとはしないであらう。』

『故に自由貿易の如き世界的施設は、未だ實現の期に熟しては居らないのである。先づ第一に Napoleon の社會組織、英國の社會組織若くは米國の社會組織の何れが世界上に普及するに至るべきかを決しなくてはならない。さりながら此の決定を見るまでには、猶ほ數世紀を閱せねばなるまい。』それにも係らず現在既に之が定まつたものゝ樣に考へてゐる者は、『正に人類の大義に奉仕せんとして己が國を亡ぼさんとするに等しいのである。』

第四信　七月十八日。

此の書翰に於いて List は更に『Smith, Say 兩氏の體系の重要なる支柱に對して攻擊を行はうと欲するのであるが、比較的重要でない諸點の攻擊は、この學說の全構造を倒壞せしめたくないと思ふ人達のために殘して置く』旨を斷つて次の如き論難に入るのである。

『此等の理論家は世界的原理と政治的原理とを混同してゐるのであるから、從つて又政治經濟學の目的をも全然誤解してゐる。此の目的は個人經濟及び世界經濟上に見るが如く、或は特に商人の取

引上に明かなるが如くに財貨と財貨との交換を行つて物を獲得することではないのであつて、他國民と交換を行つて生産力と政治的勢力とを増進し、若くは此の交換に制限を施して生産力と政治的勢力との衰退を阻止するに在るのである。從つて彼等は生産力の問題を論ずべきにも關はず、之を他にして專ら物の交換の結果のみを問題にして居るのである。『故に生産力を形成する諸要素の作用乃至は物の交換消費等の眞義が了解されてゐないのは勿論である。例へば資本にしても、彼等は人間の勤勞に依つて生産せられた現在財貨を一樣に資本なる名稱を以て呼び、この財貨を形成する樣々な構成要素は悉く共通同等且つ萬能的なる作用をなすものであると考へてゐる。彼等に從へは一國民の産業は資本の量、換言すれば生産せられた物財の蓄積に依つて制限せられるのであるといふ。而も彼等はこの資本の生産力が、自然に依つて提供せられた資源と、一國民の智識並に社會狀態とに依存するものであるといふことを無視してゐる。』故に生産せられたる財貨の現在量に資本といふ名前を與へるならば、自然的資源並びに社會的及び智識的狀態に對しても夫々一般的名稱を付與しなくてはならない。『即ち自然の資本と精神の資本と生産的財貨の資本との三が在る譯であつて、一國民の生産力は當に此の第三の資本に依從するのみならず、主として前の二者に依從するものである。』

斯くの如きは List が抱懷してゐる新學說の理論的根據となるのであるが、この簡單な公開狀で十分之を論じ盡すことも出來ないし、元來この書狀の眼目とする所は American System の學理上の論據を明かにしようといふに在るのであるから、茲には只事實に就いて此の理論が誤りでないことを示すに止めてゐるのである。則ち List は Say が英米兩國の間に羊毛及び羊毛品と棉花類とが貿易されてゐるのは、英米兩國の何れにとつても利益であると論じてゐるのを指摘して、彼の說は只個人經濟的見解のみに止まるとなし、『一國民はその國の産業が獨立し生産力が發達する程度に從つて獨立の地位を得、勢力を伸張するに至るのである。』と主張してゐる。曰く『若し米國商人が數十億の貨幣を利得し、棉花栽培者が悉く上等の羊毛及び棉織物の衣類を纒ふの便益を獲るに至らんか、米國民一般はその爲に工業上の能力を喪失して如何なる損失を蒙るに至るべきかは、思ひ半に過ぎるものがあらう。』と。

然らば生産力を增進するには自由貿易に依つて資本の增殖を計ることが唯一の手段であるとし、政治上の政策は決して資本を增加せしむるものでないのみならず全く反對の結果を招　に至ると主張する Say の所說が、只個人經濟と世界經濟との見地に於てのみ許さる可きものであつて、何故に政治經濟上に於いては誤れるものであらうか。

第一、『人口、資本及び生産的技術は、その性質上政治的勢力と國民的利害とに依つて擁護せられず拘束せられざるに於いては、世界全般に亙つて傳播せんとする傾向を有し、豐富過剩の國から僅少缺乏の國に流動せんとする趨勢を有してゐる』が、特殊の國民の勢力と利害とに依り若くはその政策等に依つて此の傾向を阻止することが出來る。

第二、『一國民の生産力が物財の資本に依つて左右せらるゝが如き事實はない。‥‥生産力の大部分は余が精神の資本と稱してゐる諸々の個人の智識的並びに社會的狀態より成るのである。』

第三、此の國民は、（イ）その有する自然の資本に依つて製造工業を養成し、生産力を增進すること

とが出來るか。（ロ）精神の資本に依つて、之等の製造工業に依る生產力の增進に必要な技術を獲得することが出來るか、又之を獲得した曉には政治的勢力を以て能く之を保護することが出來るか、（ハ）自然の資本と精神の資本とを適當に使用して行くに十分な物財の資本が存在するか、といふことが茲に問題となるのであつて、List は此の個條はすべて米國の實際上の事情に就いて解答を與へてゐる。

第四、『舊學說の學徒等は將來の生產力を獲得する爲に財貨と財貨との交換に依つて生じた利益を犧牲にすることは、一國の經濟上不利益である と主張してゐるが、』這は全く皮相の觀であつて、勿論最初は此の損失は免れないものゝ謂はゞ『是は國民の生產力を完成する爲に發生する費用なのであるから、此の當初の失費は軈て數年の後には完全なる國民經濟から生ずる所の利益に依つて十倍にも二十倍にもなつて歸つて來るのである。』更に『世人は輸入品に課稅すれば國內工業に獨占を來さしめるといふ Smith と Say の論旨を踏襲してゐるけれども、彼等は社會の進步した事情を考へざるもので、』既に國內競爭の激烈なる今日、決して永く獨占の累に苦しむ樣なことはないのである。

第五、『たとひ國內に資本及び技術の存することが十分とまでは行かずとも、政治上の手段に依つて之を外國から得て來ることが出來る。』のは第一に述べた理由に依つて推すを得る所である。而して最後に List は『合衆國は唯工業上の利益を增進することに依つてのみ勢力を增進することが出來るのである。余はこれこそ正に米國政治經濟の眞諦なりと信ずるのである。』と結んで、此の書狀を終つてゐる。

第五信　七月十九日。

『國民經濟上に於いては、諸々の個人の方針と成行と、條件と技術との影響は、多くの國民の環境が皆異つてゐる如く夫々違つてゐるのであつて、之に就いて唯一つ一般的に言ふことの出來るのは、若しそれ等が國民の生產力を增進するものであれば利益であるし、然らずんば悉く不利益であるといふ點である。あらゆる國民は生產力を發達せしめる爲には各〻獨特の進路を執らねばならない。換言すれば各國民は銘々特殊の政治經濟を持つてゐるのである。

『更に、此の事情、成行等は個人經濟に於いては或る人々に對しては有利であらうが、社會に取つては有害であるかも知れない。又反對に個人には有害であるが、社會に對しては非常に有利であることもある。則ち個人經濟は政治經濟とは異るものである。

『同樣に或る政策なり原理なりがあらゆる國民に依つて等しく採用せられる場合に、それが人類全體に取つては甚だ有利であらうが、猶ほある特殊の國に取つては有害となることもあるし、又之とは反對の場合も存する。政治經濟は世界經濟とは異るものである。』

此の三ヶ條の主張を List は以下の各書狀に於いて順次に論述するのである。

第一、各國民は銘々特殊の政治經濟を有す。

先づ第一の命題の下に於ては List は人口の增加は果して國民經濟の目的を促進するものであるか、勞働は如何、制限拘束はあらゆる國家に於いて等しく有効且つ有益なものであるか、米國はあらゆる工業に對して同等の保護を加へて良しきか、運河、鐵道、機械、新發明、消費、節約等は如

何なる利益を有するか、法律家、醫師、說敎師、裁判官、立法者、行政者、文學者、著述家、敎師、音樂家、俳優等は生產力を增加せしむるか、貨幣の輸入と生產力增加との關係は如何であるか、といふ樣な問題を揭げて、各國の實際に就き自己の意見を糺してゐるのであるが、その要旨は畢竟するに各國民は銘々特有の經濟的、文化的、並びに社會的關係に適應して、生產力增進の上に各自獨特の道程を踏まねばならぬといふに歸するのである。

第六信　七月二十日。

第二、個人經濟は政治經濟に非ず。

『一私人は唯自身の個人的目的乃至は家族的目的に對して備ふる所あるのみで、他人の爲若くは社會の繁榮の爲に意を注ぐようなことは滅多にない。彼の方針と見解とは局限せられてゐて、私的業務の範圍を超えるが如きことは稀である。彼の產業上の活動は彼が住つてゐる社會の狀態に拘束せられてゐるのである。然るに一國民は各個人が各自の私人としての努力を以てしては滿すことの出來ない國民大多數の社會的欲望を滿さんとするものであつて、啻に現在に對して備ふる所あるに止らず將來の久しきに對してもよく配慮するし、又平時のみならず戰時の用意をも怠ることがないのである。その見る所はその國民が領有する國土の全般に及ぶに止まらずして廣く全世界に亙つて擴がるのである。一個人は自己の利益を增殖するに當つて公共の利益を阻害することがあらう。又一國民は一般の福利を促進するが爲にその各員の內或る一部の者の利益を阻止することもあらう。けれども個人は皆社會力に賴つてその力を藉りて來なければならぬものであるから、一般的幸福の爲には個人の働きを拘束し制限することは免れない。社會からの拘束を全く蒙ることの無い個人は蠻民であつてあらゆる個人を自由に放任するといふ原則は印度人の間に於いて最も盛に行はれてゐるのである。茲に於ても亦眞理は中庸に位する。事物のよく自律し、個人的努力のよく之を促進するを得るが如き場合に、社會力を藉り來つて總てに對する制御を敢てし促進を加へんとするが如きは惡政である、けれども又社會力の干涉に俟つてはじめて進捗せしむるを得るが如きことを放任して顧みないのも、惡政たる點に於いて之に劣るものではない。』

寔に自由放任の原理は個人の利益と國民の利益とが決して矛盾せざる場合に限つて眞理たることを得るものである。然しながら斯くの如き場合は決して事實上あり得べきことではない。此處に不思議とも云ふべきは、舊學說を主張する人達が此の事實を甚だよく感得してゐることであつて、而も彼等は之を認めればその結果自分等の主張する所の崩壞するに至るべきことを懼れて、必死になつて之に反對してゐるのである。現に Cooper 氏の如きも『余の定義せるが如き國民の性質を認め、若くは余が以前の書翰に於いて述べた如く人類が幾多の國民に分れてゐる所から現れて來る結果を認めるならば、舊學說の全部を覆へすに至るべきことを悟りつゝ、此の性質を否定し』てその著の十九頁に國民とは畢竟精神的實在であり、文字上の存在物であつて、『一個の言葉を一の實物に變せしめ、單なる文字上の考案を現存する實體と化せしめて平然たるが如き人の想像の內に存する以外、何等眞實の存在を有せざる』ものとなし、從つて之は恰かも代數學上で非常に複雜な數字の代りに記號を用ふるのと同じことであると言つてゐるが、氏は正に舊學說の擁護に熱中せるの餘り文字上の

存在と精神上の存在、即ち所謂精神的人格とを識別するの明を失つたものである。幾多の民衆を擁し、共同の權利義務を有し、共通の施設を持する統制ある社會、之を例へば合衆國の如きを如何で單なる文字上の存在として無視してしまふことが出來よう。是は疑もなく合理的存在としてのあらゆる性質とあらゆる實體とを具有して居るのである。

『斯くの如き誤まれる根底に依つて Cooper 氏の全體系は粉碎せられるのである。彼の聰明なる考察も抗論も無効である、そのあらゆる深奥なる論斷も無益である。常識は彼の推論を虛僞の原則に基けるものとして排斥するのである。』

第七信　七月二十二日。

第三、政治經濟は世界經濟に非ず。

『主張と主張、利害と利害、國民と國民、等の間に於ける精神上並に物質上の恒久的鬪爭に依つて、人類の境遇を改善し、彼等の勢力と能力とを高揚せしめんとすることは、天帝の計策し給ふものゝ如くに思はれる。歷史は之を裏書して居る樣である。……從つて當初各個人に對して致命的なものゝ樣に見え又事實その時代に對して破壞的結果を及ぼした樣な事柄も、後代の繁榮に對する原因となり、人類を衰弱せしむるが如く思はれた事柄も、實はその勢力を强大ならしむるに役立つたのである。』『正に之と同じことが諸國民間に於ける產業上の鬪爭についても言はれるのである。よしんば吾々が自由貿易は人類にとつて有利であると想像するにしても、共同の法律の下に於ける自由にして障害なき通商が、果して現に存する產業上の鬪爭と同樣に生產力の發達を促進するや否やは、猶ほ甚だ疑問とすべきである。』

斯くの如き疑問は姑く置くとしても、現代の世界に於ける如く幾多の國民の對立してゐる限りは國民經濟は各國悉く之を異にしてゐるのであるから、若し一國が自國の力と福祉と獨立とを犧牲に供して全人類の幸福を增進しようとした所で、それは無益である『一國民がその國の特殊の勢力の伸張を政策上の第一原理となすべきことは、之正に自己保存の法則の命ずる所であつて、此の國民が他の諸國民と比較して自由の上に於ても文明の上に於ても產業の上に於ても愈〻益〻發達して來る樣になれば、それに伴れて獨立を喪失しまいとする憂懼は一層濃くなり、生產力を增進して政治的勢力を盛大ならしめんが爲には出來得る限りの努力を傾けたいといふ希望も一段と强くなるのである。』然るにも係らず Cooper 氏は國民なるものゝ存することを否定し、その論理を更に推し進めて曰く、『如何なる種類の商業や工業の爲にも戰爭を行ふ樣なことは不必要である。吾輩は寧ろ、商人が自國の沿海を離れて何れかの土地へ趨いて貿易を營む樣な場合には、彼は之を自己の危險に於いて爲すべきであつて、自國民の平和を攪亂し、その國內の平和なる消費者を犧牲としてまでも戰爭を行はしむるが如きことは許さるべきではないと考へる。彼の業務はその要求してゐる程の保護を加へるだけの必要はないのである。』と。果して然らば此の政策に依れば如何なる結果に到達するであらうか。若し外國の海洋に於いて我が國の船舶が先づ一艘捕獲せられたとする。之を我が國が一向に咎めもせず其の儘にさせて置けば、我が國の船舶はやがて悉く外國の有に歸してしまひ、外國貿易は全く他國の船舶と他國の法律とに左右せられて國家の獨立といふものは失はれてしまふで

あらう。斯くの如き國民の自殺を防止するには何等かの自治政府を必要とするのである。

一國民の貿易にして既に斯くの如しとすれば、製造工業並びに農業上の利益も亦容易に十分なる發達を爲す能はず、能くその成果を維持する能はざるが如き場合には當然數多の個人の利益を犧牲としても保護を加へなくてはならないのである。

抑〻工業上の力は運輸航海等の海運上の力と同樣に長い間の努力を積んだ結果漸くにして樹立することが出來るのであつて、あらゆる種類の製造工業の發達は皆他種の工業の發達を始として工場、勞働、器具機械等凡百のものゝ爲に左右せらるゝは元より、或は經驗、技術の進歩とも離る可らざる關係を有し、之が爲に新工業の勃興は非常な障害を蒙つて容易の業ではないのである。即ちその失費は著しく嵩み、着手する上の僅かな失敗も大なる損失を招いで時としては全企業の倒壞してしまふことさへ珍らしくはないし、又生產物とても當初から完全な貨物を市場に提供することは到底望まれないのである。それだといつて消費者たる各個人は、此の不完全な貨物を購買することはやがて將來に於いて安價で且つ又外國品にも優る程の良い貨物を得るに致るべき道であることをよし確信して居ても、仲々進んで之を購買し國家工業百年の計を樹立するの一助を藉さうとはしないのである。從つてかゝる新興工業を放置すれば直ちに倒れてしまふであらうし、誰かまた前者の轍を踏んで此の危險を再び敢てしようとする者の現はるべき筈はないのである。所が既に產業狀態の進歩した舊國に於いては、一般の事情が非常に發達してゐるから、斯くの如き危險は遙かに少いことは言ふまでもなく明かであらう。

新舊兩樣の國民の間に於ける相違に以上の如きものありとすれば『舊國はその自由と精氣と政治的勢力とを維持してゐる限り、通商の自由を利用して、將に隆興に赴かんとする他國民の工業を壓伏することが出來る。……之に加ふるに舊國の國內市場が新興國に於けるよりも一層關稅の保護を加へられ、新興國內に於ける競爭が戾稅、及び其の市場に於ける課稅の缺如に依つて助勢せられてゐる樣な場合には、新興國はその爲に愈が上にも舊國との競爭に堪えることが出來なくなるのである。』

斯くの如き人爲的政策の結果を List は次の書翰の內に說かんとするのである。

第八信　七月二十七日。

第三、政治經濟は世界經濟に非ず。――（續論）

『公平なる關稅制度に依つて獲ることの出來る利益は政治的利益である。』と前提して、此處に List は四個の利益を算へてゐる。

（一）、『吾が國民の產業に對する國內市場を確實ならしむるが故に、製造工業の力はあらゆる現象、代價の變動並びに他國民に於けるあらゆる政治的及び經濟的狀態の變動に對して安全になる。』

（二）、之に加ふるに、『我が工業は斯かる利益を享受せざる他國民と競爭して優に之を凌駕することが出來る。』

此の二ケ條に依つて List は Smith, Say 等が關稅、戾稅、航海條令等を以て獨占を致さしむるものなりと主張するの誤れることを指摘して曰く、『此等は一國民全體に對して或る種類の產業の特權

を與へるものであるといふ世界的意味に於いてのみ獨占であるけれども、政治經濟の見地からすれば此の名稱を失ふものである。その理由は、此等はその國民の各個人に對して國民的特權の利益を分ち受くるの平等なる權利を得せしめることが出來るからである。』と。

（三）・或る貨物が國内に於いて製造するよりも低廉に外國で買ふことが出來るなら、何も苦しんでまで國内の製造業を維持するには及ばないといふ世界的見解から言へば、保護關稅は自ら國内貨物の高價なるを招くものであると考へられて居る。併し『吾々が外國から低廉に購入することの出來るのは僅か數年だけのことであつて、却つて將來永年に亙つて高價なものを購買することになるのである。或は平時に於てこそ安價に購入するを得るのであるが、戰時に於ては甚だ高價を支拂はねばならぬ。物價を見るに現在の貨幣額のみを以てすれば明かに安價に購入する譯であるけれども、將來吾々の購買するを得るに至る價格を考へれば比較にならぬ程の高い代價を支拂つてゐることになるのである。』在來の學說に於いてかゝる關係の全然看過せられてゐるのは、論者が世界經濟と政治經濟とを誤り、貨物の交換の結果をのみ顧みて生產力の增減に關する原因を無視してゐるからであつて、貨物の利得と力の喪失とを天秤にかければ果して如何なる結果を生ずるであらうか。

（四）『茲に世界主義的學理の創說者並びにその徒弟等が全く見逃してゐる一の法則が在るが、之はあらゆる企業に適用するを得るもので、而もその實際に行はるゝに於ては個人並びに國民の產業は之に依つて有利な成功を納めることが出來るのである。此の法則とは、一度び必要にして且つ實施すべしとせられたる產業を遂行して行く上の確實性のことである。』如何なる新企業も着手の當初は失費が非常に大きく萬事に甚だ不利益なるを免れぬが、その遂行せらるゝ年月の久しきに及ぶに從つて生產物は段々安價になり一般に有利な狀態に進んで行くのであるから、從つて企業を屢〻變更し轉々する樣なことでは徹底的に一の成功を納むることは出來ない。國民經濟上に於いても同じ道理で『時としては或る部門の產業を飛でもない位盛大に赴かせるかと思へば、又時としては全然之を閉止してしまふ樣に、生產力に對して非常に動搖のある影響を及ぼすが如き事情程、一國民の產業上に危險なものはないのである。』『從つて一國民が國民經濟上先づ第一に執らねばならぬ方針の一は、政治的政策に依つてかゝる確實性を樹立し、產業の衰退する傾向を防止することであつて、此の目的を達する主要なる手段は公平なる關稅に在るのである。』

『Smith 氏は英國の經濟的發達がその憲法、企業心及び國民の勤勉並に節儉なる慣習に歸するものとなして、英國關稅法の有益なる結果を否定し、斯くの如き國民的繁榮の原因に關する正しい見解を全然缺いてゐたのである。』List は更に米國に就いて保護關稅の必要を力說し、而して最後に『國家產業を外國から襲來する風の中に露して置く樣な國民は、如何にしてあらゆる未來に對して其の產業の建設を保護して居る國民と競爭することが出來るであらうか。』との言葉を以てその論を結んでゐる。

第九信　七月二十六日。

政治經濟は世界經濟に非ず。――（續論）

以下の書翰に於いては List は專ら實際狀態に就いて考察を行つてゐるが、先づ彼は當代に於ける

英國の政策を批評して、英國宰相 Canning, Huskison 等は決して Smith の敎へたるが如き目的を懷いて居つたものではなく、Smith の著書を常に懷中して居つたといふ Pitt もその實は彼と全然相反する策略を私かに廻らしてゐたのであつて、彼等が熱心に Smith の學說に耳を傾けたのは、かくの如き謀計を潤色せんが爲に外ならないのであると警告を與へてゐる。

然らば現在英國が口に自由を唱へ、世界の繁榮の爲めには現在確立した獨占的地位をも犧牲とすることを辭せぬ樣な態度を示してゐるのは何故であらう。更に甚だ不可解なことには、そう言ふ口の下から英國は他國の競爭に對し、殊に合衆國の發達に對して疾視の眼を向けつゝあるのであるが、之は何を意味するものであらう。『余は英國の狙つてゐる所を攻究して見た結果、其の目的が自國の工業、商業並に海運力を、他のあらゆる國民の到底競爭する能はざるまでに伸張せしめんとするにあることを發見した。』

故に英國の行つてゐる所を一個の主義、一系の原則に照らして觀るならば、そこに何等の統一々貫せるものあること無く、時としては自由の原理を振り廻すかと思へば、別の場合には全く反對に權勢と金力とを逞しうして、自國の利害に都合のいゝ樣なことばかりを行つてゐることが分かるのである。則ち Canning 氏の政策は歐洲大陸諸國の勢力に能く對抗せんが爲に南米市場を獨占してしまはうといふにある。彼は現在の合衆國はさして恐れてはゐないが、將來この國が發達して來ると、自國の產物が販路を奪はれ、南米市場に強大な競爭者を生じ、ひいては海運業發展の根據を危からしめられる樣に至りはしまいかを見越して、徐々とその對策をも講じつゝあるのであつて、米國に取ては此の際急遽以て國家工業の發達を計るに非ずんば、英國に對抗すべき絕好の機會は過去未來を通じて又と再び來ることは無いであらう。

List は斯くの如き政策の執つて以て大いに成功を納むべき所以を續いて縷述せんとするのである。

第十信　七月二十七日。

政治經濟は世界經濟に非ず。――（續論）

一國民が他國民に對して原料品や生活資料を輸出し、他國民から加工製造せられたる完成品を輸入するのはとりも直さず國內に於ては困厄と衰退との原因となり、外國に對しては之に從屬するに等しい。Canning 氏は一旦は英國の農業上の利益を犧牲として、米國產の小麥を輸入する方針を執るであらうが、これは彼が米國工業の利益を壓倒して南米の市場を獨占しようといふ意圖に出づるからであつて、若しその計畫通りになつたとしたら米國產業の蒙る打擊は果してどれ程であらうか。『過去十四年間に卿等米國民は如何なる事實を經驗して來られたらう。賃銀、利潤、資本、地價等の低落、日常の消費と收入の減少との不均衡、土地の改良と地代との不釣合、而して之等の結果としての破產、競賣、銀行取付、國民的慘狀。が是であつた。米國は穀物を只の一グレインも英國に賣らなければ良かつたのではなからうか。忽ちの內に我が國民の繁榮を破壞して之を昔に返へすことは、外國人、亂暴者、敵國の自由自在であつたのではなからうか。』

次に List は當時米國の銀行が正貨所有高を著しく超過して銀行券を發行するは不可なりとし、

又此の銀行制度が常に地價其他不動產の價格の騰落に依つて盛衰するの信用上甚だしき惡影響あることを指摘して曰く『地價、並びに之を基礎として貨幣を發行するの可能性は、生產物の價格に從つて昇降する。……從つて土地生產物の代價を高低せしめる原因は悉く地價の騰落と國家の銀行事業の動搖とを生ぜしめるのである。故にかゝる銀行制度の原則とすべき條件は、大きな動搖を阻止する樣な國民的組織に依つて農產物市場の確實を保つことであつて、これを保つには即ち製造工業を起して農產物に對する國內市場を拓かなければならない。かくの如き條件の下に於て始めて銀行制度は生產力としての作用を發揮することが出來るのであつて、かゝる條件を備へない國では、それは只時々刻々產業の根幹たる信用を破壞して行くばかりである。』

『世界主義の理論の建設者等は地價騰落の原因及び結果に就いては全く何等の言說を行ふことを忘れてゐる。一國民の繁榮は、その國民の富の大部分を形成してゐる土地其他の財產の價格の確實に依賴するのであるから、彼等が之を忘れてゐる等とは甚だ不思議と言はねばならぬのであるが、何故之が看過せられたかは明かである。即ち Smith 氏が氏の體系を作り上げた國に於ては、土地の大部分は終身領有となつてゐるために自由に取引することが出來なかつたので、氏は只地代の變動のみを知つて地價に變動あることを知らなかつたのである Say 氏は殆とあらゆる財產が自由に賣買せられてゐる國に住みながら、その先師に盲從して此の缺けてゐることを看過してゐるので、氏は些細な事柄を除いては常に必ずかの先師に盲從してゐるのである。所が我が米國に於ては、財產の取引は最も頻繁に行はれて居るのであるから、吾々は此の著名な學說の缺陷を指摘してよく之を補ふことが出來るのである。』

第十一信　七月二十九日

政治經濟は世界經濟に非ず。――（續論）

既に述べた樣に米國が英國に農產物を輸出することが決して利益とすることの出來ない以上は、米國の棉花に就いて見ても同じことである。List は玆に、米國の棉花產額が一八一六年には八千一百萬封度あつて、二千四百萬弗の收入を齎したが、當時その價格の甚だ低廉なりしため栽培者は擧つて生產高を增して收益の增大を計らうとした爲に十年後の一八二六年にはその產額は二億一千四百萬封度の多きに達したが、之に依つて獲たる收入は依然として二千五百萬弗の低きに止まり、僅々一百萬弗の增收しか齎らさなかつたことを、數字を以て證明して曰く『若し初め耕作者が擧つてその收穫の半額を Mississipi 河に投じて居たなら、彼等はその半分に對して現今と同額の收益を得ることが出來たであらう。從つて荷造の煩勞も半分は助かつたのである』寔に人類全體に取つては非常に有益な生產力の增加も、此の國一國の生產力に對しては有害となるのである。各個人が收益の增進することを希つて收穫を殖さうとするのは、個人經濟上に於てこそ利益ではあるが、之に依つて增加した產額に對する需要は依然として一樣に止まり、爲に却つて代價の下落を來したのである。『吾人は玆に明瞭な數字に依つて、若し物の生產が二の二倍によつて四に成るならば、價値を生產するといふ點ではそは往々にして一・五乃至はそれより少額に止まることを知るのである。』見るべし、個人經濟と國民經濟と世界經濟と、悉く相一致するものに非ざることを。

『南部諸州が目下苦しみつゝある大不利益の原因は、穀物生産地方たる各州の利益を壓倒する原因と同一であつて、此が穀物を過剰に生産するに反し、彼が棉花を過剰に生産するが爲である。兩者共に適當なる分業を要求してゐる。その住民の一部の者は、他のもつと有利な職業を求めなければならない。兩地方を改善するの全秘訣は正に茲に存するのである。』而もこの策を廻らすには適當な る時を以てせねばならぬ。『現狀に顧るに英國は米國の棉花を缺く能はずして之を輸入しなければならない。今此の時を逸せずして南部が木棉工業に着手すれば、棉花の輸出を追々減少せしめて國内製品を增加することを得るであらう。』更に米國に對して能く確實なる市場を提供するものは佛蘭西である。『米國の英佛兩國に對する眞の政策は、確かに久しきに亙つて等閑視せられてゐた。抑〻合衆國は英國より離れ、佛國と相結んで政治上の獨立を得たのではないか。而して只この一途に於てのみ此の國はその經濟的獨立を獲得することが出來るのである。』

第十二信　七月三十日。

政治經濟は世界經濟に非ず。――（結論）

最後の書翰に於いて List は以上の論述に殘されたる航海及び貿易上の保護の必要を説述せんとするのである。

抑〻内國製造工業の保護奬勵に依つて米國の羊毛製品、棉製品等の生産額並に消費額が甚しく增加することは、既に述べた通りであるが、『原料品及び生活資料と、製造工業品との交換が盛に行はれる樣になる結果、國内取引並びに沿海、河川、運河等の航海業は之に比例して增加するに至るのである。更に之に斯る完成品の輸出增加と、その結果生ずる外國品の輸入增加とが加はる。故にAdam Smith 自身も大工業は、貧弱なる農業國よりも遙かに大なる分量の外國貨物を消費することを認めてゐる（Wealth of Nations. Book III. ch. iii）のであつて、一度び英國の狀態を顧れば、如何なる議論よりも遙かに雄辯に此の事實を證明してゐるのである。一國の貿易及び航海業が唯原料品と外國工業品との交換ばかりであるとすれば、果してどれ程の程度のものであらう。凡そ現在の事情は如何なるものがあるかといふに、英國の對外貿易は非常に大なるものであるが、内國商業は猶ほ遙かに之を超過して居るのである。たとひ如何程外國との航海が大なるものであらうとも、自國の沿海、河川、運河の航海噸數は之とは比べものにならぬ位多いのである。而も英國の對外貿易及び航海業は悉くこれ製造工業の上に立つものに非ずして何ぞや。』乃ち一言にして盡せば、外國貿易及び運輸航海の發達を圖らんが爲には、先づ國内工業を大いに促進しなければならないのである。『吾々は吾が米國の製造工業をこの國の自然の資けと人力とに適應せる水準まで高めなければならないのである。』

以上論じ來つて最後に List は American System なる保護政策に對して何等反對すべき根據の存せざることを主張するのである。曰く、『英國の商人を除いては、如何なる階級の人士たりと雖も、American System のために損失を蒙る樣な者は一人もないのである。始めは我々は英國が戰爭をし向けて來はしまいかといふことを怯えて居た。然しながら既に吾々はその恐るゝに足らざることを知るに至つたのであるから、大いに合衆國繁榮の問題を討究すべきである。』と。

（註）此の最後の書狀は Notz 氏が Weltwirtschaftliches Archiv. 21 Band. Heft 2. に獨譯して飜刻したものに依つた。只私が承服出來ないことはその日附が二十七日となつてゐることで、即ち二十七日には第十信が認められ、第十一信が二十九日に書かれてゐる以上、最後の結論たるこの一通が二十七日に書かれたとなすことは何等か特別の事情のない限り甚だ不合理に思はれる。加ふるに最後の書狀が三十日に書かれたことは色々な傳記に記されてゐるので、茲には日附だけを改めて置いた。Notz 氏の獨譯に二十七日となつてゐるのは明かに誤植であると推斷する。

以上を以て List の公開狀に現はれた經濟思想の全般を大略窺ひ盡すことが出來た。彼の所論は元より今日吾々の觀念する經濟學の理論と比較すべき性質のものではないが、その詳細を茲に述べる暇を有たぬ。只一言加へて置きたいことは、彼の Smith, Say 等に對する論難攻擊も甚だしく杜撰であることで、始め私は隨所に註を加へて一々その考證を試みる計畫であつたが、かくては猶ほ多數の紙幅を要すべきを慮つて遂にその一切を省略したのである 更に此の公開狀と Das nationale System. との比較對照も姑く凡てを讀者の判斷に委ねることした。

猶ほ本誌一月號に發表した拙稿に就いて起草當時有せざりし諸書を其後閲讀するを得て幾多修正すべき點を發見したが、その内特に重要な個條だけを茲に簡單に摘記する。

（一〇〇頁） List が Rafayette 將軍と相會したのは同將軍が Philadelphia 滯在中の如くに記したが、之は誤りで將軍が Albany 市に趨いた時同市に於て出會したのであつた。

（一一八頁）註（十三）に於いて疑問とした Review etc. なる冊子と Examination etc. なる冊子とは全然別なもので、List の執筆したものは本文に記しておいた通り前者である。從つて Hirst 女史の考證は全然見當違ひである 猶ほ Review etc. を發見したのは Notz 氏の研究の賜であつて、同氏の論文を所載せる Weltwirtschaftliches Archiv. 21 Band. Heft 2. を嚮に手許に缺いてゐた爲、この間の消息を審にする能はざりしは遺憾であつた。

更に私の校正が甚だ粗漏であつたために、凡そ十ヶ所餘の誤謬をそのまゝに殘しておいたことは閲讀を賜つた方々に對して誠に申譯ないことであるが、その内意味の上に甚だしい相違を生ずる點だけを正しておく。

一〇一頁、終ヨリ三行目　視察（誤）　視察（正）

一〇五頁、始ヨリ二行目　六百二十ターレル（誤）　九百二十ターレル（正）

一三三頁、始ヨリ七行目　一八四五年（誤）　一八三七年（正）

以上偏に讀者諸氏の寛容を希ふ次第である。